

での江別C₁式から江別C₂式の変化に対応する「北海道2類」から「北海道3類」への変化」がみられるという（小林 1993）。近年は更にこれらと古式土師器との関係について検討が行われている（石井 1994・木村 1999等）。

北海道内で出土した弥生系土器は現在までのところ、石狩低地帯と後志・檜山管内の日本海側に多く分布し、八雲町以東の太平洋側では出土していないようである（乾 1990等）。この空白の意味するものが北大I式の時期以降にはどのように変化したのか、土師器の分布の広がりとも重ね合わせると、興味深い問題である。

（中田裕香）

註 1 南川IV群は、1976年刊行の報告書では文様構成の簡略化の程度によってa類とb類の2つに分類されている（高橋・内山・土田ほか 1976）。1983年の報告書（上野・羽賀・田部ほか 1983）では文様構成を主に10類に細分されたが、それらの関係や新旧については言及されていない。

- 2 大沼は千歳遺跡¹³の土器を「帶状に縄文を沈線で区画する恵山式末期の文様が施されていて、後北式というよりは恵山式というべきもの」とも述べている（大沼 1982）。これに類似した恵山式土器は松前町白坂第4地点遺跡等から出土している（久保・井上・石本ほか 1983）。
- 3 小牧野遺跡では南川IV群や後北C₁式に相当するものも出土し、それらの中には胎土に海綿骨針の含まれたものが少量認められる。
- 4 上野は「一般的なC₂・D式」を「古」と「新」の2つの段階に分けている（上野 1992）が、八雲町内から出土した後北C₂・D式は破片資料のみのため、細分は行わなかった。
- 5 井上は胎土に海綿骨針の含まれた後北C₂・D式について、北海道・秋田県・岩手県の例を挙げている（井上 1995）。
- 6 この層からは後北C₁式も出土しているが、弥生系土器の出土した発掘区とは一致しない（八雲町教育委員会編 1987b）。
- 7 上野の定義では「撚糸文を主に用いた地文が全面に施されたもの」とある（上野 1992）。
- 8 石井もほぼ同様な見解を示している（石井 1994）。

2 石器について

今年度の調査では続縄文時代の後北B式土器が中心に出土し、点取り遺物の石器も出土状況から同時期の所産であると判断した。今回は野田生5遺跡で主体的な石器として捉えられ、且つ不定形石器としてあまり取り上げられることのないピエス・エスキューについて若干の考察を行ってみたい。ピエス・エスキューは27点（個体）が出土し、内20点がI層出土であるが、I層はII～IIIa層を主に攪乱した層であること、遺物が続縄文時代を主体とすることから、全て同一時期とみなし分析を行った。

ピエス・エスキューは日本では芹沢長介、岡村道雄らによって初めて注目された。芹沢は観察される剥離面が石器素材と成りえる剥片を剥離していないこと、共伴する台石、敲石がピエス・エスキューの製作に密接に関与したこと等から両極剥離技法により製作された目的的な石器とした（1974）。岡村は諸々の特徴的な属性を指摘することによりピエス・エスキューを明確化し、さらに製作技術、年代、分布、機能にまで言及した。両者の研究は、それまで石核や不定形石器として看過

されてきたピエス・エスキューを各地域の各時期に普遍的に存在する器種として認識したものであった(岡村1976)。阿部朝衛は峠下聖山遺跡の資料を検討し、ピエス・エスキューにみられる両極剥離は製作技術ではなく、使用法によるものであると考察した(阿部1979)。また前述の観点からピエス・エスキューの各形態が使用過程を示すものとし、機能喪失した状態を形態的に捉えた。さらに阿部はバイポーラテクニックが各時期、各地域に出現することに着目し、バイポーラテクニック自体はピエス・エスキューの認定条件とはならないことを指摘した(阿部1983)。以上のような研究を概略的に踏まえ、(1)石器の形態と(2)使用石材の2点を主題に観察を行った。

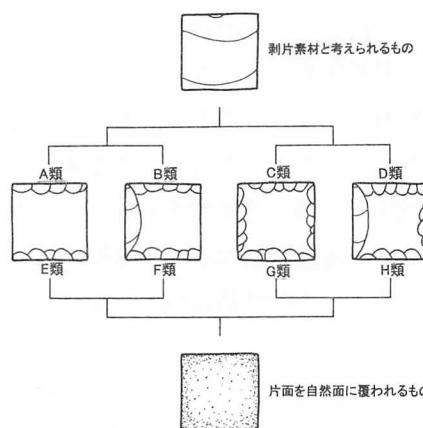
(1)石器の形態について(主に遺棄の形態として)

「形態は四辺形を呈する。」(芹沢1974)と定義されるように、野田生5遺跡出土のピエス・エスキューも全て四辺形を呈している。今回は石器の長幅比(長さ／幅)、断面形状、二次的剥離部(以下刃部)の角度に対して観察を行った。ここで用いる刃部とは、両極剥離打法によって剥離面が生じた部位であり、直接的に被加工物に接する機能部と加撃面(打面)を含む。出土した資料から石器の軸を頻繁に転回させたことが観取され、また、資料からでは加撃部と直接的機能部を判断できないことから便宜的に二次的剥離部を刃部と呼称する。IV章で記載したピエス・エスキューの分類模式図を図V-1に示した。

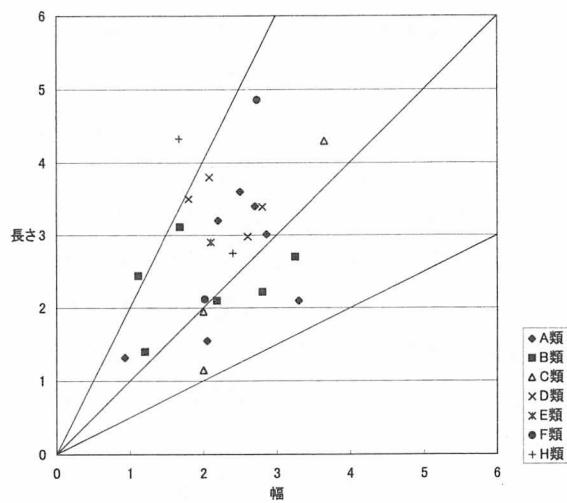
長幅比を図V-2に散布図で示した。長幅比はおよそ0.5から2の間に分布し、1.5以下のものが全体の約8割を占める。各類型にまとまりは見出せないが、B・D・F・H類は比較的2に近いものが多い。これは樋状剥離面が生じたことにより幅が減じたためと考えられ、樋状剥離面を持たないA・C・E類は7割が長幅比1~1.4に分布している。本来的には正方形に近い形状で機能した石器の可能性がある。大きさは2~4cm(C・D・F・H類については長幅の平均)のものが7割を占める。主に4~2cmの間で遺棄し、2cmを下回る段階では有効に機能しないことが考えられる。

断面形状は図V-3に示すように分類した。断面は刃部のほぼ中央で観察し、結果を図V-4に示した。紡錘形は14点あり、全体の52%を占める。特に刃部が2か所であるA・B類に10点が集中している。A・B類に断面紡錘形が多いのは、作業の進行にともない素材の両面が剥離され、角度が鋭角化に向かうことが考えられる。楔形は11点、41%で、残りの半数近くを占め、D・F類に多くみられる。これは平坦な樋状剥離面を刃部に設定したことが原因にあげられる。断面が先鋭な刃部を持つもの(紡錘形と楔形)は全体の93%に及ぶが、ピエス・エスキューが遺棄されたものであれば、先鋭な断面形とは機能を失った形態とも捉えられる。半数の資料(楔形・四角形)が持つ平坦な面が刃部として使用されるのはそれが有効な形状であり、加撃により発生した樋状剥離面を利用するにはこれを示すものであろう。また、素材の剥離方向と作業方向が同一なものが10点と多数認められるのは素材打面を刃部に利用したのではないだろうか。

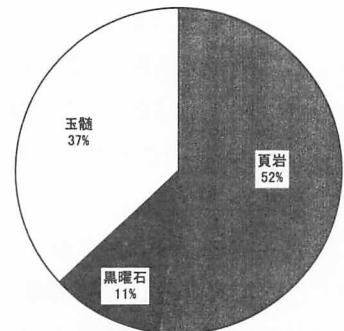
では、先鋭な刃部はどの段階で機能を喪失したのか。刃部(より鋭角な側を選択)断面の角度の計測を行った。なお、角度は5度間隔で計測した。刃部角は50~70度の間に全体の7割が分布する。表V-1は刃部角と長さの相関関係を示したものである。大きさ3cm以下のものは各刃部角度に散布することからも、むしろ大きさが機能を喪失した原因と考えられよう。しかし、3cmを上回る資料は40~70度に12点がまとまる傾向がある。本来的には3~5cmの資料のように40~70度に刃部角がまとまり、機能していたが、作業の進行に伴い3cm以下のもののように刃部角が分散していったのではないだろうか。ピエス・エスキューは使用によって産出されるもので、使い減りを前提とした便宜的な石器である。石器がたとえ機能を保持していくようとも作業の終了と共に遺棄される可能性は高く、こうした点を踏まえながら理解を行う必要があるだろう。



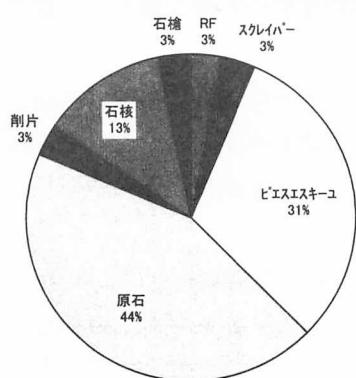
図V-1 ピエス・エスキュー分類模式図



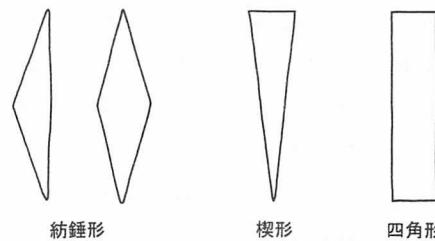
図V-2 ピエス・エスキュー長幅比



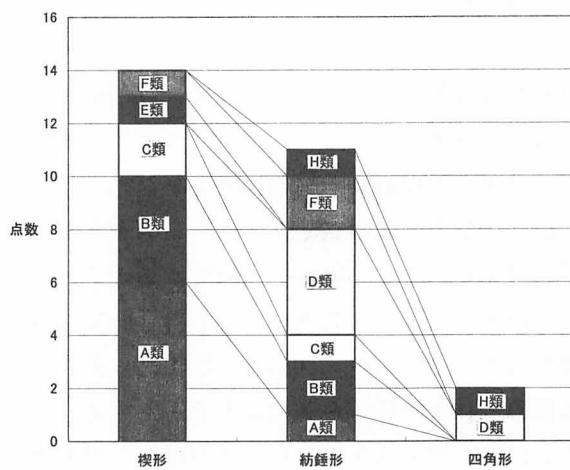
図V-5 ピエス・エスキューの石材別比率



図V-6 玉髓の器種別比率



図V-3 ピエス・エスキュー断面形状の分類



図V-4 ピエス・エスキュー断面形別点数

表V-1 ピエス・エスキュー刀部角と長さの点数一覧

刀部角	0~1	~2	~3	~4	~5	合計
0~20	0	0	0	0	0	0
~30	0	1	2	0	0	3
~40	0	1	1	1	5	8
~50	0	1	2	0	0	3
~60	0	0	2	1	1	4
~70	0	1	2	1	3	7
~80	0	1	0	0	0	1
~90	0	0	1	0	0	1
合計	0	5	10	3	9	27

表V-2 器種別及び石材別点数一覧

	チャート	安山岩	玉髓	黒曜石	砂岩	真岩	緑色泥岩	総計
石鐵	0	0	0	6	0	9	0	15
石槍	0	0	1	1	0	0	0	2
搔器	0	0	0	0	0	2	0	2
スクレイパー	0	0	1	1	0	11	0	13
両面調整石器	0	0	0	2	0	4	0	6
ピエス・エスキュー	0	0	10	3	0	14	0	27
Rフレイク	1	1	1	6	0	25	0	34
削片	0	0	1	0	0	3	0	4
石核	0	0	4	0	0	4	0	8
原石	0	0	14	0	0	0	0	14
石斧	0	0	0	0	0	0	2	2
石鎌	0	0	0	0	1	0	0	1
敲石	0	0	0	0	4	0	0	3
すり石	0	3	0	0	6	0	0	9
台石・石皿	0	0	0	0	4	0	0	2
合計	1	4	32	19	14	72	2	145

まとめれば以下のようになる。(1)刃部に平坦面が使用される。(2)長さ3~5cm以上、刃部角40~70度で機能する。(3)3cm以下になると有効に機能しなくなり、また刃部角も一定でなくなる。

平坦面に関しては、刃部に使用される平坦面は加撃面として利用すれば力を効率よく集中させて伝達することができる。また、平坦面を機能部に利用しても加撃の際、ピエス・エスキーユを据える角度により、面として機能するのか、縁辺として機能するのかが変化してくる。平坦面を利用するメリットを考察することは、機能を模索する手掛かりになるだろう。少ない属性観察のなかで考察を行ったが、今後さらに使用痕や破損の特徴などにも着目し、ピエス・エスキーユの機能について検討ていきたい。

(2) 使用石材について

ピエス・エスキーユに使用される石材は、頁岩、黒曜石、玉髓があり、その比率を図V-5に示した。頁岩が最も多く52%、玉髓が37%、黒曜石が11%である。トゥールに使用される石材においてもこの三者が最も多く、ピエス・エスキーユには比較的量の多い石材が選択されている。こうした傾向は前述した便宜的な石器の性格と矛盾しない。しかし表V-2のように、頁岩、黒曜石ではスクレイパー、石鏃、搔器などピエス・エスキーユ以外の器種にも結びつきがみられる。図V-6のように玉髓が石器石材に利用される場合、圧倒的にピエス・エスキーユとの結びつきが強い。こうしたことからは、(1)玉髓がピエス・エスキーユの石材として適した石質を持つため好んで用いられたこと、(2)玉髓の石質がピエス・エスキーユ以外の器種には不適当であること、(3)特定の器種を産出する作業が石材環境に影響されながら行われたことなどが考えられる。ただし、ピエス・エスキーユに適した石材を検証するには、ピエス・エスキーユの機能と対象物を特定し、実験作業を行う必要があり、今回は時間的制約もあるため行っていない。上記の推測をもとに、玉髓とピエス・エスキーユの関係について若干考察したい。

剥片などを含めた各石材の点数は、玉髓96点・2,218.2g、頁岩357点・2,954.1g、黒曜石は195点・130.7gである。この内、石核などを除くトゥールに加工されたものは玉髓13点(13.5%)・104.2g(4.7%)、頁岩65点(18.2%)・678.8g(22.9%)、黒曜石19点(9.7%)・74.4g(56.9%)である。同様に各石材の剥片の比率をみると、玉髓が点数33.3%・重量18.3%、頁岩が点数79.8%・重量62.8%、黒曜石が点数90.2%・重量43.1%であった。行われた作業内容にも左右されるが、頁岩と黒曜石が剥片を多量に出土するのに対し、玉髓は剥片と石器が少なく、逆に原石や石核が多いことが読み取れる。そして上述したように玉髓製のトゥールは90%がピエス・エスキーユとなっている。

玉髓の剥片とピエス・エスキーユに対し石質の観察をおこなった。その結果、打面が欠損する、打面の位置やリングが不明瞭である、階段状剥離や折れが発生している、節理を含む、主要剥離面が力の分散により複雑な形状をしているなどの状態が顕著に観察され、全点がいずれかの特徴を保持していた。剥離の際に不規則な割れや折れが生じやすく、調整加工を含む通常の剥離が難しい石質であると判断できる。

以上の観察結果から野田生5遺跡で出土した玉髓は、ピエス・エスキーユ以外の器種には適さず、不定形且つ便宜的な石器であるピエス・エスキーユに対しては石材を供給しやすかったと考えられる。原石・石核・素材を遺跡内に持ち込み、必要に応じてピエス・エスキーユを産出する作業を行い、作業終了後は遺跡内に遺棄したのであろう。

出土点数から、ピエス・エスキーユを使用した作業は遺跡内では主要な作業であったとみられるが、頁岩や黒曜石に比べ、玉髓はもっとも安易に消費できる石材であるのだろうか。渡島地方周辺における玉髓の産地は、長万部町茶屋川付近から今金町花石、美利河にかけての地域が知られているが、遺

V 調査の成果と課題

跡との距離は直線で30kmほどである。この地域で採取できる玉髓は非常に良質で、今金町神丘2遺跡などでは後期旧石器時代の石刃石器群にも玉髓が多用されている。茶屋川付近では野田生5遺跡に類似した石質の玉髓も容易に採取が可能であるが、30km以上の遠距離から便宜的石器のために質の悪い石材を選択、採取したとは考えにくい。横山英介氏のご教示によれば、八雲町内の河川流域を対象にした石材調査の結果、ルコツ川、遊楽部川、野田追川で石英岩の円礫が採集できるようである。石質を伺う限りでは野田生5遺跡出土のものに類似しているようだが、実見はしていない。

石器の性格からも野田生5遺跡のピエス・エスキューはこうした在地の石材を使用した可能性を考えたい。ピエス・エスキューに関しては、他遺跡との形状や石材比率に関する比較や、遺跡周辺の石材環境を調査することにより、今後も検討を重ねていきたい。

(坂本尚史)